

人がつくれた十勝川 ... 統内新水路

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

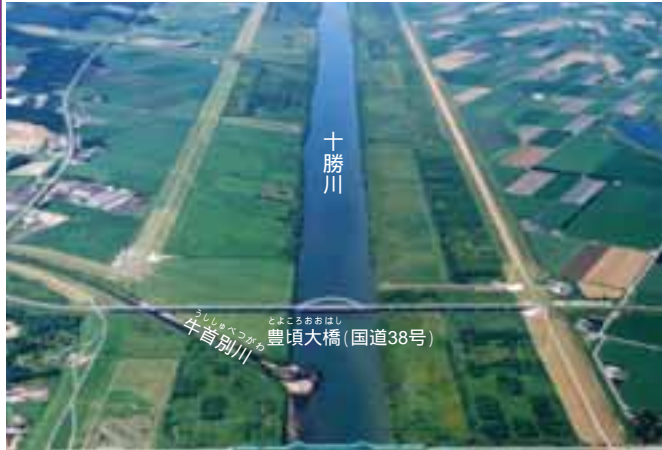
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

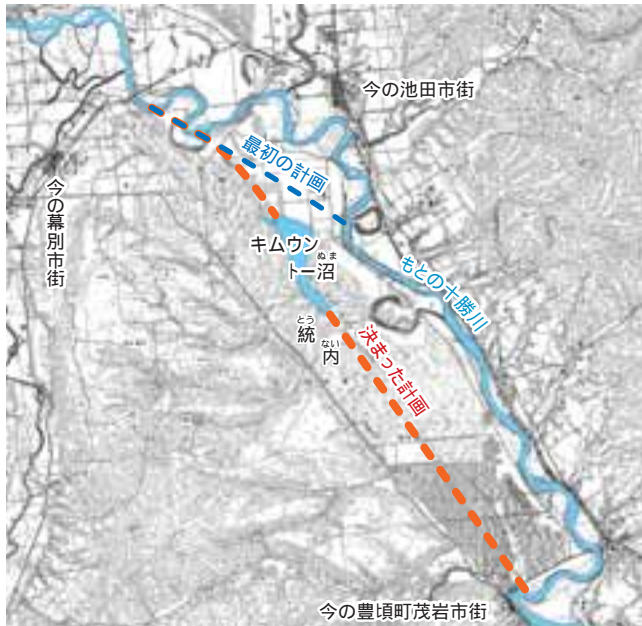
第5章 発展と今、そして未来へ

用語

さくいん



豊頃大橋(豊頃町)から上流の十勝川。このまっすぐな流れは、人がつくれた「統内新水路」。



もとの十勝川(—)と最初の新水路計画(—)と、変更になったあとの計画(—)。(国土地理院所蔵の1/5万地形図を使用、25%に縮小・着色)

水路をほる「エキスカベーター」²

水路は「ベルトコンベアー式ラダー・エキスカベーター²」という機械が水路ぞいに移動してほっていました。

この機械は、ベルトコンベアーにいくつものバケツ(バケツのようなもの)がつけてあり、これを回転させることで土をほるものです。

工事現場には、このエキスカベーターが移動するための線路がしかれました。

機械だけではなく、人の力でもほられていて、刑務所の受刑者も活やくしました。



明治31年(1898)の大洪水をはじめ、川ぞいの農地は何度も洪水の被害をうけます。(p 186)

何とか十勝川の流れをよくして、洪水を減らしたい。そんな開拓者たちの思いは、強くなるばかりでした。

明治時代の終わりから「北海道拓殖計画」が実行されます。その中で、十勝川の下流をまっすぐにするこ

によって、流れをよくしようという計画が立てられました。

さらに、大正11年(1922)の大洪水(p 186)がこの計画をおし進め、昭和3年(1928)工事は始まりました。

工事は、はじめ千代田から川合(池田町)を通り、今の旧利別川へつながるような水路をほる計画でした。しかし、地元に住む人たちから必死の願い(p 192)があったことと、湿地帯の水はけをよくして農地を増やす目的のため、新水路のルートは変更されます。

千代田から茂岩まで15kmをほる

昭和6年(1931)新しいルートが決まりました。千代田から、「キムウン トー沼(池田町)」を通って茂岩(豊頃町)まで達する、およそ15kmという水路をつくることになったのです。

これにより、長くスムーズな水路ができる上、豊頃~茂岩(豊頃町)にあった、大きなZ字カーブがなくなることで、十勝川下流全体がかなり直線的になり、洪水の流れがとてもよくなることになりました。

さらに、湿地帯が多かった統内原野(池田・幕別・豊頃)にまたがる平野部)の水はけがよくなり、新しく農地をつくりやすくなります。



(上) 統内新水路をほるエキスカベーター。(円内) 小型のエキスカベーター。(左) 受刑者が監視されながら働いているところ。

(写真:「十勝川写真で綴る変遷」「十勝川治水史」より)

1 住民からの願い(じゅうみんからのねがい): はじめの予定地である川合地区(池田町)の住民にとって、入植以来洪水(こうずい)とたたかひながら守り、つくり上げてきた畑の土がほられ、堤防(ていぼう)に使われることは許せることではなかった。また、打内太(う

つないぶと: 豊頃町北栄)や育素多(いくそた: 豊頃町)の住民にとって、もとの十勝川は、洪水によって作物をうばいどる「無くなってほしい川」であった(p 192)
2 エキスカベーター: 土をほる機械のこと。今ではパワーショベルがこれにあたる。

機関車や馬の力で運ぶ土

土運車という、土を運ぶ台車のためにも線路がしかれました。

土運車は連結され、これを蒸気機関車が引っぱって運んでいきました。工事のためだけの蒸気機関車が走っていたのです。ほった土は、堤防をつくるために使われました。

機関車のほかに、馬も土運車を引っぱりました。

馬は昭和35年（1960）くらいまで、機関車は（ディーゼルも入れて）昭和37年（1962）くらいまで、川の工事で活やくしました。



作業をした人たちと、蒸気機関車。左後ろが土運車。



キムウントー沼に土砂を運ぶ馬車。



昭和35年（1960）ころまで、馬車によって土砂が運ばれた。



(上) まっすぐな統内新水路によって、十勝川の水は流れやすくなり、洪水の被害が大きく減った。



(右) 昭和12年（1937）、洪水によって新水路に水が流れこんだところ。

洪水による通水

昭和12年（1937）、ほとんどの水路が完成していたときに、洪水が起きました。

この時のことを、昭和10年（1935）から育素多（豊頃町）に移住していた村上五作さんが、のちに書き残しています。

「三年続きの洪水かと、天を仰ぎ、川岸の高地を水が乗り越えて来ないように神に祈った時、奇跡が起きたのです。増水が止まったのです。そして二、三時間後には水が減りはじめたのです（豊頃よもやま話作品集 あかだも『曲がっていた川』より）」

新水路には、工事をするために十勝川から水が入らないよう堤がつくられていましたが、洪水は、この堤を乗り越え、くずして流れこみました。そのため、十勝川の水の量が減ったのです。

こうして、最後は洪水の力で、そして、その洪水の被害を防ぎながら、千代田～茂岩の間に新しい十勝川（統内新水路）が生まれました。

(このページの写真は、4点とも十勝川写真で綴る変遷より、また地図は、国土地理院所蔵の1/5万地形図を使用、25%に縮小・着色)

3 受刑者（じゅけいしゃ）：犯罪をおかし、裁判の結果、刑務所（けいむしょ）に入れられて自由をうばわれた人。
4 土運車（どうんしゃ）：土を運ぶ台車（トロッコ）、20トン蒸気機関車は、5合（3m

3）土運車30両を引く。馬は1合（0.6m³）土運車を4両引く。
5 豊頃よもやま話作品集 あかだも（とよころよもやまばなしさくひんしゅう あかだも）：豊頃町豊寿大学文学部（ほうじゅだいがくぶんがく）編集

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

“この川さえ無かったらなァ” ... 「魔の川」でもあった旧十勝川

統内新水路のルートは、最初の計画から変えられています。そこには、最初の計画予定地であった川合地区（池田町）の人たちの「入植以来洪水とたたかいながら守り、つくり上げてきた畑の土がほられ、堤防に使われることは許せない」という声と、打内太（豊頃町北栄）や育素多（豊頃町）の人たちの「毎年のように洪水をもたらす十勝川は、無くなってほしい川だ」という思いがありました。（ p190）

昭和63年（1988）、統内新水路の記念碑が建てられたことに寄せた、嵐正義さんの文章を紹介します。

先人たちの勇気を讃えて 嵐 正義

今回、十勝川新水路五十周年記念事業として、「記念碑」建立が実現したことに対し、町並びに関係機関のご理解とご援助のおかげと、心から感謝申し上げます。

これが実現するに至ったそもそもの起因は、昭和六十年（1985）十月、豊寿大学文学科主催の“豊頃よもやま話座談会”（北栄、十弗、礼文内地区）での古老のご発言でありました。

この地区の昔を知るためには、先ずもってこの地を流れていた旧十勝川の洪水を切り離しては語れない位、洪水に苦しめられた土地柄でありました。

古老方のお話しによりますと、洪水の度に川は母なる川から魔の川に変身し、幾多の人命と畜命を奪い、更に一年の稔りを根こそぎもぎとり、人々をして、父祖が志して入植したこの地を捨て高台地区に移住しなければならぬ程、苛酷をきわめ、洪水は、大なり小なり毎年のように襲ったとのことでもあります。

そんな折、十弗市街地に説教所を開いて布教活動をしておられた泉沢天外師のもとに集まった人たちが、茶のみ話の中で、毎年暴れる十勝川への愚痴から、「この川さえ無かったらなァ」とこぼした一言からヒントを得て、この川の流を統内側に変えることが出来なしかと話が弾み、「やれるだけやってみよう」とすぐさま行動に移った先達たちは、町に道にと、誠意を持って陳情に当られました。

土地を愛し、家族を愛した先達たちの情熱は、地域を動かし、行政を動かし、絶対実現しそもない、夢物語に等しい“たわごと”を、立派に町づくり、国づくりに結びつけたのであります。

先達たちの東奔西走のご苦労が実り、昭和十二年完成された新水路に川の流を切り換えたことにより、水害のない現在の肥沃な穀倉地帯に生まれ変わったのであります。

これもひとえに、この人たちを後で支えたご家庭や、“たわごと”にも似た発想にも、誠意をもって対応された町村や道、国のご援助のおかげと、只々、頭を下げるのみであります。

そして、住民主役の地方自治のお手本として、いつまでも町の歴史に残る記念碑建立をのぞむ古老のお言葉に私共は感動し、実現のための協力を誓いあったのです。

時、あたかも水路完成五十年という節目の年を迎えるに当り、文学科にて記念碑建立の趣意書を作り、当該地区の区長会に訴えたところ、早速これが実現のめ、地域や行政に図られ、現在に至ったのであります。

これで水害と闘った当時の人々や、水路変更のために家業を省みず地域のために献身された先達たちのご苦労も些少なりとも報われると、喜ぶものであります。

この川との生活に明け暮れた人々の苦しみは、村上五作氏が“豊頃よもやま話”（町民芸誌『河口』に発表）の中でつぶさに書かれていますので省略しますが、夢物語りにも等しい発想を採り上げられた行政の



昭和63年（1988）、茂岩橋下流の堤防に建てられた「十勝川統内新水路記念碑」と、あとで後ろに取りつけられたプレート。

1 豊寿大学（ほうじゅだいがく）：豊頃町の高齢者学級。さまざまな分野の「科」がある。
2 よもやま話（四方山話：よもやまばなし）：いろいろな話。
3 先達（せんだつ）：ある方面でりっぱな仕事を、あとの人を導く人。先輩（せんぱい）。

4 陳情（ちんじょう）：えらい人、とくに議会や政治家、役所などに今のようすを述べて、何とかしてくれるようたのむこと。
5 たわごと：ばかげたこと。

けつだん ささき せんだつ こうせき えいえん
決断と、それを支えた多くの先達たちの貢績を、永遠
に記念できるこの碑の建立は、正に時期を得た快挙と
して、心からの拍手をおくりたいと思います。

わが郷土豊頃の開拓の歴史の中に、二宮報徳会の偉
業と併せて、この先達たちの偉業も町史を飾ることで
しょうが、最後に私共が古老からお聞きした勇気ある
先達のご芳名を記しましたが、ご芳名の洩れがありま
したらお許し下さい。

- 元豊頃村長 小林 官太 元豊頃村議 美馬 清作
 - 元豊頃村議 石田 平蔵 元豊頃村議 堀田謙次郎
 - 元道会議員 山本与七郎（池田町）
 - 豊頃側住民 山崎惣次郎 豊頃側住民 吉村政治郎
 - 豊頃側住民 竹田 夏樹 川合側住民 神谷 兵作
 - 川合側住民 神谷 常吉 川合側住民 久保田康雄
- （敬称略）
（『豊頃よもやま話作品集 あかだも』より
漢字・かなづかいなどは原文のまま）

上の文章の中に出てきた、村上五作さんによる、水
害の苦しみを描いた文章を一部紹介します。
昭和10～11年（1935～36）、統内新水路の工事が進
む中、しかし、洪水は完成を待ってくれません。明治
31年（1898）や大正11年（1922）の時以外にも、何度
も洪水はおそいかかってきたのです。

曲がっていた川 村上 五作
（前略）治水工事にのぞみを託し、統内原野の夜明け
を信じて、打内太に四戸、育素多地区に九戸の人たち
が住んで居りました。

昭和十年、島流しにされたような不安な気持ちで、
この地に分家して参りました私たち夫婦は、この人々
に暖かく迎えられ、新生活の第一歩を踏み出したので
した。私ども夫婦は、作付の済んだ畑を嬉しさに、一
生懸命除草管理に励み、近所の人たちも賞められるよ
うな作物に発育させました。

ところが、その夏の終りに、早くも一回目の試練が
やってきました。一町二反位作付した辛子を収穫した
その夜から降り始めた雨は、三日三晩降り続き、まだ
雨の晴れぬうちより十勝川は泡立ちをはじめ、その上、
大西風を伴い二十時間位増水が続き、川岸の耕地は見

るまに水没し、刈り取って荷穂に積んであった燕麦等
も、次々と流されてしまいました。

辛子は、手伝いに駆けつけてくれた本家の兄たちに
より二階に上げてもらい、かろうじて助かりましたが、
馬は、膝まで水につかりっぱなしでした。私宅は、普
通地より三尺位高い所にありましたが、床上二尺、地
上四尺位の水がつかまりました。普通平地では、七尺位の
浸水だったと思います。（1尺＝約30.3cm）

燕麦類は流れ、豆類は全部腐れてしまいました。唯
一の収穫は、辛子三十俵位のものでした。勿論、家の
周りに積んであった薪もすっかり流れ去っていました。

次の年は、父の援助で作付をすることができました。
この年、春先より晴天続きで、「今年は良いでしょう」
と村の古老方も言われるし、私どもも、何とか今年は
穫らせて貰えるだろうと、張り切って作付も終り、小
学校で行われる地域運動会等を見にも行かず、除草に
努力しておりました。

七月の月上旬頃、長い晴天続きで、一雨欲しいと人々
が言っているうちに、待望の雨が降り始めました。七
月十一日だったと思いますが、人々の喜びも束の間、
雨は三日続きの豪雨となり、雨足が白いカーテンのよ
うになって風に送られては降りつぎ、それはすさまじ
いものでした。

四日目の夕方、雨は止みましたが、それから一昼夜
増水し続けました。そして、泥色の水は、畑や野菜を
ことごとく埋没してしまいました。「畑作物は、花時
を外れれば何とかなるものだ」という人々の期待を嘲
笑のように、水の引いて行った後より、豆類は、「ぐ
にやり」と倒れていってしまいました。麦類なども殆
どが枯れ、生き残った物も唯ポーっと実の入らない空
穂がお盆近くになってから出たくらいで、ビートも水
引きの悪い所は腐れてしまいました。（後略 p191）

（『豊頃よもやま話作品集 あかだも』より
漢字・かなづかいなどは原文のまま）



「十勝川統内新水路記念
碑」の位置。豊頃町、茂岩
橋下流の左岸堤防。
礼文内川がもとの十勝川。

6 些少（さしょう）：わずかであること。少し。
7 豊頃よもやま話作品集 あかだも（とよころよもやまばなしさくひんしゅう あかだも）：
豊頃町豊大学文学科（ぼうじゅだいがくぶんがく）（1）が編集。

8 分家（ぶんけ）：親の家や農地（本家：ほんけ）から出て、新たに一家を構えること。
9 荷穂（にお）：豆やえんばくなどの作物を、クキごと刈り取ったあとがわがすために、
まとめて積みあげたもの。

第1章 十勝の平野や川ができるまで
第2章 先史時代と川
第3章 アイヌ文化と川
第4章 十勝開拓と川
第5章 発展 今、そして未来へ
用語
さくいん